様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２７１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００７５７

研究課題名（和文）自己効力感の向上を目指すリメディアル英語教育－言語が話者へ与える影響の活用－

研究課題名（英文）A Study of Improvement of Learners' Self-Confidence through Remedial English Education

研究代表者
東本　裕子（TOMOTO, Yuko）

横浜商科大学・商学部・准教授

研究者番号：００７６１７９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、二言語使用者が使用する言語によって態度や行動、または感情表現を変えるという現象をリメディアル英語教育に活用し、英語に苦手意識を持つ学習者が英語による表現活動を通して新しい自己像を構築し、英語力と共に自己効力感を向上させられるような言語アイデンティティ教育的指導に貢献することを目指した。
学習者の英語に対する苦手意識の原因や各言語使用時の心持ちについて調査を実施し、その結果に対応した指導を授業や海外短期研修、国際交流プロジェクトにて行い、英語による自己表現を通して学習者の新たな自己の発見や自己効力感の向上、他分野への前向きな取り組みの姿勢に繋げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学習者の強い英語苦手意識から来る自信の無さや自己効力感の低さを取り除くために、苦手意識の原因をアンケートやインタビュー調査で解明し、効果的なリメディアル英語教育を実施した。言語が話し手に与える影響を有効に活用し、英語での自己表現、L2 selfの発見などを通して学習者が新しい理想的な自己像を構築し、授業や海外短期研修、国際交流プロジェクトの場を通して新たな自己表現を行い、英語力と共に自己効力感を向上させることを目指した。授業内外での多様な取り組みへの参加を通して英語への苦手意識を克服し、自信を持って他分野へも積極的に挑戦するようになる学習者が多数見られた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to make contributions to improve self-confidence of Japanese learners of English through remedial English classes by using the phenomenon that bilingual speakers of Japanese and English change the way they talk or communicate depending on the language they use.
Questionnaires and in-depth interviews were conducted to find what had caused the learners the sense of a dislike to English, or how the styles of learners' self-expression in English change compared to when they express themselves in Japanese. The results of the surveys were used effectively in the remedial English classes, short-term overseas study programs and international collaborative projects. As a result, many learners have found their new selves through the second language selves, have improved their self-confidence, and also they have shown the tendency to actively engage in other things beside English learning after they overcame their weakness and their self-confidence was improved.

研究分野：外国語教育

キーワード：自己効力感　L2 self　言語の話者への影響　リメディアル英語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究者が授業を通して出会う学生の多くは、英語に大きな苦手意識を持っており、英語力も中学校の段階で止まっている者も多い。現在の勤務校で教鞭をとるきっかけとなった公募要件の一つに、「英語が嫌いで強い苦手意識を持ち、英語恐怖症である学生を、いかに英語好きにさせるか」について自分の考えを述べることが含まれていた。入職し、実際に授業を担当し判明したことは、一般的に英語学習の動機として挙げられることの多い、英語力や国際感覚の向上、異文化へのパスポート、就職活動における有利性、というようなものは、なかなか学生が身近なこととして捉えず、どこか他人事のような距離を持って英語に接する傾向があることであった。

また、多くの学生は自己肯定感が低く、総じて大人しい上に、母語である日本語での発言や自己表現も控えめで、他者とのコミュニケーションに苦手意識を持っている場合も多い。このような学生と過ごす中で、英語を通して新しく得る自己像を前面に出した英語教育を試み、学習者の内面的な成長と繋がるような教育の実践を目指すという状況であった。

２．研究の目的

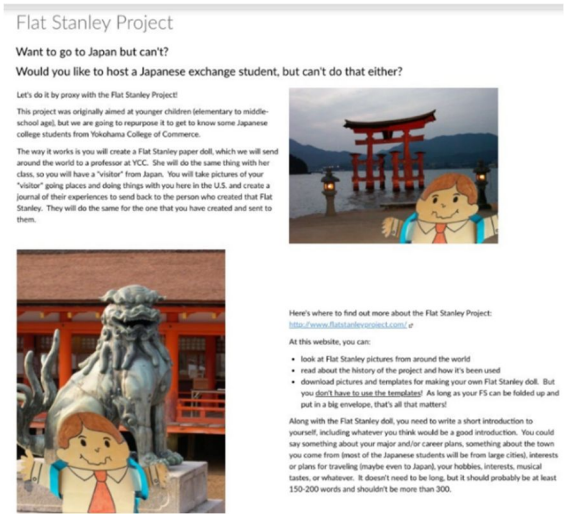
日本語での自己表現や自己開示が苦手な学生でも、授業において英語で話す際に、時として身振りも表情も豊かになり、発言の内容や態度も日本語を話す時に比べて積極性を増す学生も見られるようになった。二言語話者が使用する言語によって態度や行動、または感情表現を変えるという現象を英語教育に活用し、学習者が英語による表現活動を通して新しい自己像を構築し、英語力と共に自己効力感を向上させられることを研究の目的とした。特に、英語に苦手意識を持っている学生、また英語を必要と感じていない学生に対し、英語による新しい自己像 L2 self の獲得という言語アイデンティティ教育的なアプローチを学習者の動機付けに活用することを目指した。

３．研究の方法

使用言語が話し手に及ぼす影響を第二言語習得研究に関連付けた Norton(1995)や、日本語母語話者が英語を話す時の心持ちの変化に関する Burton(2011)や東本(2015)の先行研究をもとに、学生の心持ちや感情表現が使用する言語によってどのように変化するか、また学習者の自己効力感を英語力と共に向上させる、という観点からの英語教育法を探るため、勤務大学で必修・選択英語を履修している学生、また海外短期語学研修（提携校である University of Pittsburgh at Bradford での 2 週間の夏季英語・異文化体験研修）へ参加した学生を対象に調査を行った。また、英語を使用する機会や、異文化に接する機会が少ない学生たちのために、学内で国際的なイベントや異文化交流プロジェクトを多数開催し、学生が英語をより身近なものとして捉えられるような状況を作り、英語を話せるようになりたいと自発的に思わせる環境作りに努めた。学生が英語に接する機会を増やすために、講義を英語で実施する選択科目や、学外の英語研修施設である Tokyo Global Gateway にて学生が異文化体験を行う選択科目も設置し、その履修生も調査対象とした。

講義の履修者や国際イベント、異文化交流プロジェクト参加者には、アンケート調査やインタビュー調査、またグーグルフォームを利用したルーブリック評価調査を実施した。海外短期英語研修参加学生に対しては、1 セメスター15 回の事前講義を行うと共に現地研修を引率し、学生の変化の様子を 2 週間にわたり間近で観察した。また、参加学生の英語力の推移を追うと共に、アンケート調査と半構造化インタビュー調査を行い、英語を使用することによる新しい自己像 L2 self の獲得、英語や異文化に対する気持ちの変化、英語学習への意欲や動機、自己効力感が研修前後でどのように変化したかについて調査を行った。

さらに、コロナ禍で海外渡航が制限される中で学生の英語学習の意欲を喚起し、実際に英語を活用する場を作るために、オンライン国際交流を計画し、COIL(Collaborative Online International Learning) Flat Stanley Project として海外の 5 つの大学と交流を実施した。英語を母語とする学生をはじめ、英語や日本語を第二言語として学ぶアジア圏の学生との交流を通して様々な文化と多様な英語 World Englishes へ触れる機会を設け、より幅広い興味関心を引き出す機会を多く持った。非同期型、同期型双方の交流を通じ、各国の学生の外国語学習への熱心な取り組みと高い語学力に実際に触れ、学生の自発的な英語学習への動機付けを目指した。実践の一例として、Flat Stanley Project を基にオンラインでのバーチャルホームステイ交流を考案し、韓国やアメリカの大学と実施した。



Flat Stanley Project

Want to go to Japan but can't?

Would you like to host a Japanese exchange student, but can't do that either?

Let's do it by proxy with the Flat Stanley Project!

This project was originally aimed at younger children (elementary to middle-school age), but we are going to repurpose it to get to know some Japanese college students from Yokohama College of Commerce.

The way it works is you will create a Flat Stanley paper doll, which we will send around the world to a professor at YCC. She will do the same thing with her class, so you will have a "visitor" from Japan. You will take pictures of your "visitor" going places and doing things with you here in the U.S. and create a journal of their experiences to send back to the person who created that Flat Stanley. They will do the same for the one that you have created and sent to them.

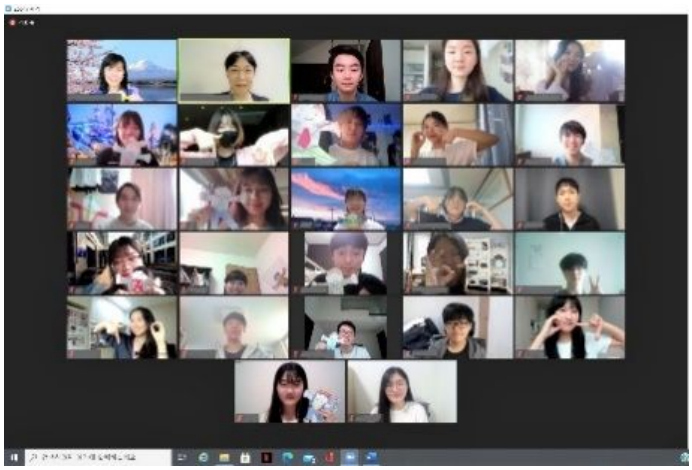
Here's where to find out more about the Flat Stanley Project:
http://www.flatstanleyproject.com/

At this website, you can:

- look at Flat Stanley pictures from around the world
- read about the history of the project and how it's been used
- download pictures and templates for making your own Flat Stanley doll. But you don't have to use the templates! As long as your FS can be folded up and put in a big envelope, that's all that matters!

Along with the Flat Stanley doll, you need to write a short introduction to yourself, including whatever you think would be a good introduction. You could say something about your major and/or career plans, something about the town you come from (most of the Japanese students will be from large cities), interests or plans for traveling (maybe even to Japan), your hobbies, interests, musical tastes, or whatever. It doesn't need to be long, but it should probably be at least 150-200 words and shouldn't be more than 300.

アメリカの大学との交流サイト



韓国の大学との同期型交流の様子

University of Pittsburgh at Bradford (UPB大学)と交流

アメリカの大学生と日本の学生が作成し、バーチャルホームステイをした Stanley 人形

４．研究成果

授業内や学内外で多数開催した国際異文化交流プロジェクト、また海外短期研修の場での英語での自己表現を通して、学生が様々な形の L2 self を獲得する様子が観察された。英語による自己表現により新しい理想的な自己像 ideal L2 self を構築し、日本語を使用する時とは異なる新たな自己を発見し、英語力と共に自己効力感を向上させる様子が見られた。海外研修をはじめ、大学の授業や学内外での国際的なプロジェクト等の多様な取り組みに参加することにより、学生の英語そのものへの苦手意識と合わせて他者とコミュニケーションを取ることへの苦手意識も薄まり、日本語での普段のコミュニケーションや、英語以外の他の教科や部活動等やアルバイト等の学外活動へも自信を持って積極的に挑戦するようになる前向きな様子が見られるようになった。英語を使用することで得られた L2 self がきっかけとなり、英語力のみならず学習者の自己効力感が向上する結果に繋がったことは、大変喜ばしい成果であり、後頁記述の学会発表と論文として纏めた。

また、海外短期研修に参加した学生を対象に実施した調査結果の中で、複数の女子学生のリスニング力の向上が顕著であったため、言語の背景文化が話者に及ぼす文化的且つジェンダー的な影響の観点より、英語話者と日本語話者の声のトーン等話し方がどのように変化するかを比較し、論文として纏めた。

COIL(Collaborative Online International Learning) Flat Stanley Project として海外の 5 つの大学と交流を実践した実例報告として、オンラインでのバーチャルホームステイ交流を韓国の大学と実施した様子を実践報告研究ノートして纏めた。

学生に散見される基礎英語力の欠如とそこに起因する自信喪失に対応するものとして、大人の学び直しの教材「中２英語をおさらいして話せるようになる本」を出版し、複数速度の音声教

材や付随動画教材等、徹底的に学習者ひとりひとりの苦手分野に対応し得る独自の工夫を施した学習教材を作成することで総合的に学習者の自己効力感の向上を目指すリメディアル英語教育研究の総纏めとした。

＜引用文献＞

１． Burton, S.K. (2011). “English makes me act in a different way”: To what extent can a change of language affect speech and behavior? *The Language Teacher*: 35.3 May/June 2011. Tokyo: JALT Publications, pp.31-36
２． Norton, P.B. (1995). Social identity, investment, and language learning. *TESOL Quarterly,* 29(1), pp.9-31
３． 東本 裕子 (2015)「使用言語による思考・表現方法の変容に関する一考察」『比較文化研究 No.118』 pp.139-154

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 東本裕子　長島倫子　検校裕朗	４．巻 第55巻　第2号
２．論文標題 Flat Stanley Projectを活用したCOIL型異文化協働学習と国際交流の可能性	５．発行年 2022年
３．雑誌名 横浜商大論集	６．最初と最後の頁 51-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuko Tomoto	４．巻 Vol. 3, No.2
２．論文標題 Learners' Self-Esteem Improvement by Constructing Ideal L2 Self-images in Language Learning	５．発行年 2021年
３．雑誌名 International Journal of Advanced Research in Education and Society	６．最初と最後の頁 38-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuko Tomoto,　Yoko Shirasu	４．巻 Vol.2, No.2
２．論文標題 A Multi-perspective Approach to a Short-term English Training Program in the U.S.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 International Journal of Advanced Research in Education and Society	６．最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuko Tomoto	４．巻 Vol.2, No.2
２．論文標題 A Study of How Voice Pitches are Influenced by Cultural Gender Factors	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Asian Journal of Research in Education and Social Sciences	６．最初と最後の頁 84-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuko Tomoto,　Yoko Shirasu	4．巻 June 086-074
2．論文標題 Japanese College Students' Changes through a Study Abroad Program	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceedings 14th International Conference on Language, Innovation, Culture and Education	6．最初と最後の頁 92-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Yuko Tomoto, Yoko Shirasu	4．巻 Volume 12
2．論文標題 The Effectiveness of Studying Abroad Programs for L2 Students -How the Students' Minds Changed after Being Exposed to English Only Environment for 2 Weeks-	5．発行年 2019年
3．雑誌名 The Eurasia Proceedings of Educational & Social Sciences	6．最初と最後の頁 11-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　1件／うち国際学会　10件）

1．発表者名 Yuko Tomoto
2．発表標題 A Study of the Effects of English Learning on Improved Self-Confidence among Japanese Learners
3．学会等名 ASNet International Conference on Education, Social Sciences and Technology (AICEST 2021)（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Yuko Tomoto
2．発表標題 Changes of Students' Self-Expression Styles through Cultural Exchange Activities of Flat Stanley Project
3．学会等名 2021 7th International Conference on Culture, Language and Literature (ICCLL 2021)（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 東本裕子
２．発表標題 Flat Stanley Projectを活用した英語教育の可能性
３．学会等名 日本比較文化学会　第43回全国大会・2021年度国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 検校裕朗　長島倫子　東本裕子
２．発表標題 SNAに基づくFlat Stanleyを利用した日韓バーチャルホームステイプログラム
３．学会等名 SNA交流学習実践研究会（SNA-COIL）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yuko Tomoto
２．発表標題 An Analysis of Motivation and Affect of All-in-English Class and Cultural Activities in Short-term Overseas Program
３．学会等名 6th International Conference on Culture, Languages and Literature（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yuko Tomoto
２．発表標題 The Language Influence on Speakers and L2 self Image
３．学会等名 20th International Conference on Business, Economics, Law, Language and Psychology（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 東本裕子
２．発表標題 海外短期英語研修が学生に及ぼす影響に関する一考察
３．学会等名 日本比較文化学会 第41回全国大会・2019年度国際学術会議（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuko Tomoto
２．発表標題 Japanese College Students' Changes through a Study Abroad Program
３．学会等名 14th International Conference on Language, Innovation, Culture and Education（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 白須洋子、東本裕子
２．発表標題 夏季集中英語研修プログラムの成果（横浜商科大学の実践から）
３．学会等名 日本リメディアル教育学会 第15回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuko Tomoto
２．発表標題 The Influence of Language and Background Culture on Speakers in Constructing L2 self
３．学会等名 17th Conference on the Processing of East Asian Languages and 9th Conference on Language, Discourse and Cognition（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yuko Tomoto
２．発表標題 How the Students' Minds Changed After Being Exposed to English Only Environment for 2 Weeks
３．学会等名 International Conference on Research in Education and Social Sciences（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 細江哲志・白須洋子・東本裕子・清水恵子
２．発表標題 体育系学生への英語指導改善への道筋　－アメリカ大学における体育会系学生教育との比較を通してー
３．学会等名 日本比較文化学会第40回全国大会　国際学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 白須洋子・細江哲志・東本裕子
２．発表標題 マージナル大学における英語リメディアル教育の課題
３．学会等名 日本リメディアル教育学会第14回全国大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 高橋基治　東本 S．裕子	４．発行年 2021年
２．出版社 株式会社アルク	５．総ページ数 168
３．書名 中２英語をおさらいして話せるようになる本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関